

中ロ関係の「底線」

——中ソ国交正常化（1989年5月）

中居 良文

The “Bottom Line” of the Chinese-Russian Relations: The Normalization of the Relations in May, 1989

Yoshifumi NAKAI

はしがき

1989年5月、中ソ両国は国交を正常化した。本章はこの国交正常化の意味を考える。中ソ国交正常化とは一体何だったのか。国交正常化はその後の中ソ・中ロ関係にどのような影響を及ぼしたのか。

国交正常化の意味については、二つの対立する見方がある。一つの見方は、国交正常化を大きな外交的成果であり、歴史の転換点と見るものである。両国の当事者たち、鄧小平とゴルバチョフはそう主張している。鄧小平はゴルバチョフとの会談で「過去を閉じ、未来を開く」ことを提案した¹。ゴルバチョフはこの提案を即座に受け入れた。1995年に出版された回想録で、ゴルバチョフは中ソ関係の章の見出しにこの「過去を閉じ、将来を開く」と言う言葉を使っている²。果たして中ソ国交正常化はそのような画期的な出来事だったのだろうか？

これとは対照的な見方をしているのは、イギリスの国際政治学者のロー（Bobo Lo）である³。ローによれば、中ソ国交正常化は、アメリカという共通の脅威に晒されていた両国間の便宜的妥協である。彼らは緊急避難のために、即ち一種の時間稼ぎのために、嫌々ながら手を握ったのだ、とローは見る。ローによれば、中ソ両国は、自分たちにとって不都合な過去だけを一時的に封印した

に過ぎない。中ソ国交正常化は無原則的かつ便宜的な合意であるから、この関係が古典的な同盟関係に発展することはない⁴。両国の考える「未来」は異なっており利害は必ず対立する。

本章は第三の見方を提供する。それは上述した二つの見方の中間に立つものである。本章は、中ソ国交正常化が実現したタイミングに着目する。1989年5月という時期は、両国の改革政策が分岐していく直前の時期にあたる。この時期はまた、両国がそれまで進めてきた改革政策の限界が明らかになった時期でもあった。従って、本章は中ソ国交正常化の最大の意味は、この時点で中ソ関係が「普通の」関係になったことにあるとみる。普通の関係とは、両国が既存の国際社会の共通ルールである「平等互惠」原則を受け入れ、互いの外交と内政に干渉しないような関係である。

普通の関係になることは、何ら目新しいことではなく、大きな外交的成果とは言い難い。この点で、中ソの公式見解には誇張がある。一方、ローの評価は過小に過ぎると言えよう。複雑な過去を抱えた両国が「普通の関係」になるまでには、大きな努力と時の助けが必要だった。また、両国がこの時点で普通の関係になっていたことは、両国関係の全面的破綻をくい止め、その後の両国関係の基礎となった。中ソ国交正常化は両国が嵐の中で漂流し、激突することを防ぐ、錨の役割を果たしたのである。

以下、第1節では中ソ国交正常化に向かう中国側の動きを、第2節ではソ連側の動きを辿る。第3節はこの合意が達成された時期、即ち1989年5月、というタイミングの意味を考える。第4節は「普通の関係」となった中ソ関係が実際にどのように機能したかを見ることにす

¹ 鄧小平（1993）「結束過去、開壁未来」『鄧小平文選 第三卷』北京 人民出版社 291 ページ。

² ゴルバチョフ（1996）「第39章 モスクワと北京は「過去を閉じ、未来を開く」」『ゴルバチョフ回想録 下巻』工藤精一郎・鈴木康雄訳 新潮社 498 ページ。

³ Bobo Lo（2008）*Axis Of Convenience: Moscow, Beijing, and the New Geopolitics*. London: Chatham House

⁴ Bobo Lo（2008）*Axis Of Convenience*, pp.54-55.

る。

第1節 中ソ国交正常化に向かう中国

1. 改革・開放政策から国交正常化へ

中国社会科学院の陸南泉は、訪日中の1986年に「中ソ関係発展の展望」と題する講演を行った⁵。その中で陸南泉は1980年代の中ソ関係を主導したのは中国であると主張した。何故この時期に中国は中ソ国交正常化に前向きになったのか。陸南泉の挙げる理由は以下である。

1) 中国は毛沢東の死後数年で国内改革を行った。

この記述には注意が必要である。陸南泉は国内改革の例としていわゆる「四人組」の失脚（1976年）のみを挙げ、国内改革の過程を一行で表現している。これは、中国の知識人が得意とする「史記の説法」である。この説法は、複雑な経過を端折り、結論だけを簡潔な文章で表現する。実際には、この国内改革には長い時間を要した。鄧小平らが華国鋒ら、毛沢東の「全て派」⁶を指導部から排除するには4年かかった。その後、部分的な毛沢東批判である「歴史決議」が1981年6月に公表されるまでに更に1年かかった。この歴史決議における毛沢東批判は「7割は正しく、間違いは3割」という生ぬるいものであった。

2) 中国は1982年に対外政策の調整に着手した。中ソ国交正常化はこれらの調整の一部である。

陸南泉のいう「調整」は日本語では「変更」とか「修正」を意味する。これもまた、「史記の説法」である。1982年以降、鄧小平らは毛沢東路線を以下のように修正した。

- ①戦争と平和の問題については、毛沢東の過去の誤った考えを是正する。即ち、戦争は不可避ではなく、平和は維持できると考えることにした。
- ②長期の平和を維持し、近代化を推進することにした。
- ③軍縮を支持し、自主独立政策をとり、どの大国とも戦略上の関係も連合関係も作らないことにした。
- ④社会制度とイデオロギーの相違を国家関係の処理基

準としないこととした。つまり、イデオロギーの異なる国とも敵対せず付き合うことにした。

- ⑤第三世界との関係では、ソ連方式に追随せず、西欧・日本との関係では政治的経済的関係を一層発展させると共に、幅広く国際組織に参加することにした。
- ⑥香港に対しては一国兩制、台湾に対しては平和統一の方針をとることとした。

3) 中国は中ソ両国の経済関係を発展させることを望んだ。

経済関係は双方にとって重要であり、拡大潜在力も強く、1985年以降貿易額は30-50%という高い伸び（年率）を示した。1990年には現在の米中貿易額の年60億ドルに達する、という予測もあった。中ソの貿易商品は長年にわたって相互補完的である。中ソは長い国境を持つため国境貿易に有利であり、中国は輸入品目を多様化する必要がある。貿易決済方式も共通であった⁷。

これらの「調整」の延長上に中ソ国交正常化がある、と言うのが陸南泉の分析である。陸南泉はソ連も中国側のイニシアチブに應えるに違いないと考えた。何故ならば、ゴルバチョフはブレジネフ後期の一連の失敗—アフガン侵攻・ベトナムのカンボジア侵攻支持など—を引き継いでおり、経済建て直しのために国際環境の改善をはかる必要があったからである。中国が既にアメリカとの国交回復（1979年）を成し遂げていたことも、ソ連への圧力となった。ソ連は中米ソの三国関係における不利な立場から抜け出すためにも、対中関係を改善させる必要があった⁸。

陸南泉の分析は、関係改善の見込みについては楽観的に過ぎた。この講演が1986年に行われたものであることに留意する必要がある。陸南泉は、中国の改革・開放路線と対ソ政策とは同時進行すると考えていた。1986年9月には鄧小平が政治体制改革の必要性を強調していたからである⁹。しかし、改革はそう簡単には進まなかった。1986年末に中国各地で学生たちの自由化要求デモが発生した。鄧小平らはこの運動を資産階級自由化運動であると断罪し、自由派知識人たちを弾圧した。1987年1月には総書記の胡耀邦が突然解任され、改革・開放路線は後退した。現役の総書記が法的には何の権限もないはずの党の長老たちによって「解任」されるという事態が起きたのである。この事態に憤激した学生や知識人たちは各地で胡耀邦の名誉回復を要求する運動を起こ

⁵ 陸南泉（1987）「中ソ関係発展の展望」『過渡期にたつ現代ソ連—その総合的研究Ⅱ』スラブ研究センター報告シリーズ20 1987年1月 48-52ページ。

⁶ 鄧小平らいわゆる改革派が華国鋒らの保守派を攻撃するために使った造語。毛沢東の言ったこと、毛沢東の政策の全てを実行しようとするグループという意味。

⁷ 陸南泉（1987）「中ソ関係発展の展望」48ページ。

⁸ 陸南泉（1987）「中ソ関係発展の展望」49ページ。

⁹ 鄧小平（1993）「關於政治体制改革問題」『鄧小平文選第三卷』176-178ページ。

し、これが1989年6月の天安門事件に繋がった。

関係改善への見通しが楽観的に過ぎたとはいえ、陸南泉の分析は貴重である。それは、改革・開放が進展していけば、中ソ関係にどのような変化が起きうるかを正確に予想していた。中ソは敵でもなく、かといって味方でもなく、対等な関係に立つことになる。両国で改革・開放政策が進展すれば、それは自然と両国の関係改善に結びつくと陸南泉は考えていた。中国は既に1982年の時点で、「自主独立政策をとり、どの大国とも戦略上の関係も連合関係も作らない」と宣言しているので、ソ連との関係を「正常化」することに原理的な障害はない。あとはソ連の出方次第だ。こうした認識はこの時期の中国の先進的知識人たちの共通認識であった。1986年には中国の研究者がこうした見解を外国で述べることができたという事実は、注目に値する。

2. 「冷戦思惟」という重荷

2000年代になると、陸南泉の楽観論に対する批判が中国の学界に現れた。北京大学国際関係学院教授の牛軍は対ソ政策の進展ではなく、停滞に着目した。中国が対ソ政策を調整するのに何故このように長い時間がかかったのか。中国がアメリカと国交を正常化したのは1978年12月である。その後、中国がソ連と国交を正常化するまでに10年が経過していた。牛軍は1979年以後の中ソ交渉を詳細に検討し、中国の指導層が永年信奉してきた「冷戦思惟」が停滞の原因であると論じた¹⁰。陸南泉が、あたかも既成事実であるかのように淡々と記述した「調整」は実は難航していた。中国の指導者たちは国家の発展のためには対外開放が必要だと知りながら、ソ連との関係改善には躊躇したと牛軍は指摘する。

事実、中ソ国交正常化は順調には進まなかった。時間の問題については、後でまた触れることにする。

1) 冷戦思惟とはなにか

牛軍によれば、冷戦思惟とは米ソ冷戦に関わる全ての戦略や政策を含む包括的な概念である。中国はソ連の対中政策が変化するまで、冷戦思惟を捨てなかった¹¹。

牛軍は、中国が国交正常化を主導したという陸南泉の主張に異を唱える。牛軍が詳述する中国の動きは主導的であるよりはむしろ受動的である。牛軍はまた、鄧小平のリーダーシップにも懐疑的である。鄧小平は中ソ関係

の正常化が必要だと認識しながらも、ゴルバチョフに3条件を突きつけ、ソ連がそれらの諸条件をクリアするのを待った。鄧小平は強い対ソ脅威認識を党の長老たちと共有していたのであり、「未来を開く」にはあまりにも消極的であった。

もう少し詳細に、牛軍の分析を辿ってみよう。牛軍によれば、中国がソ連との正常化に踏み出したのは1979年4月である。前年の12月に米中は国交を正常化し、この年の1月には鄧小平が訪米した。米中関係が大きく変化したことが対ソ関係を見直す契機となった。1979年4月の全人代常務委は1950年2月に締結された中ソ友好同盟条約の再延長をしないと決定した。同時に中国政府はソ連と正常化協議に入ることを決定し、7月にモスクワで副部長級会談を行うこととした。この時、中国は二つの重要な決定を下した：国境問題を会談の前提条件としないこと；初回会合はモスクワで行うことである¹²。この時期、中国の国内政策にも大きな変化が起きていた。経済建設を中心とする政治路線と改革開放を目指す国家発展戦略が策定された。新時期の対外政策はこの新たな国家発展戦略に対応することが必要となった。

しかし、対外政策には長期に涉って実行されてきた思考パターンの影響が残っていた、と牛軍は指摘する。改革開放戦略が有効に機能するためには、これらの思考パターンをより合理的な思想で置き換えることが必要だった。対外政策が変更されるまでには国内政策の変更に比べてより長い時間が必要である。いわゆる「文革」の10年間、中国の外交機構は機能不全に陥っていた。新たな政治路線が実行されるためには、先ず対外関係部門に残存する極左思想が一掃されねばならず、外交機構も再建されなければならなかった。対外政策における変化は緩慢で、国内政治のような劇的変化は起きなかった。思想領域における変化は更に緩慢で、中でも最も変化が緩慢だったのが対ソ政策の領域であった¹³。

牛軍によれば、70年代初期の中国の指導者たちにとって、最大の脅威はソ連が発動する侵略戦争であった。この時代を経験した人々はソ連の「狼子野心（オオカミのような闘争心）」に深い警戒感を抱かざるを得なかった。70年代初期に形成されたソ連脅威論は簡単には消滅しなかった。80年代初期まで、中国の指導者たちは対外政策を一つの手段と考えていた。即ち、対外政策の目的は経済発展に必要な時間を稼ぐことであった。従って、この時期の中国外交は以下のような二面性を持つことになった：現代化のためには長期に亘る平和な国際環境が必要である；一方、ソ連の脅威は減少しておらず、中国はソ連の侵略に晒されている。1977年8月の十一大政

¹⁰ 牛軍（2010）「告別冷戦：中国実現中ソ関係正常化的歴史涵义」沈志華 李滨（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦と中苏关系』北京 社会科学文献出版社 538-559 ページ。

¹¹ 牛軍（2010）「告別冷戦」539 ページ。

¹² 牛軍（2010）「告別冷戦」541 ページ。

¹³ 牛軍（2010）「告別冷戦」541 ページ。

治報告（華国鋒）は「ソ連とアメリカが新世界大戦の震源地である、ソ連社会帝国主義の危険性が特に高い」と述べ、ソ連への警戒心を露わにしていた。11月1日の「人民日報」論文は毛沢東の「三個世界（区分的）理論」を引用し、毛沢東路線の正しさを強調した。三個世界（区分的）理論の意味するものは、反ソ国際統一戦線の形成である¹⁴。

毛沢東の死（1976年9月）後も、毛沢東の後継者たちはソ連の脅威が依然として存在すると確信していた。鄧小平がその代表であった。鄧小平は1980年1月の中央幹部会議で、80年代の三大任務として「反対覇権主義、実現祖国統一、経済建設」を挙げ、反覇権とは即ち反ソであると宣言した。ソ連脅威の認識は深く中国の指導者たちの心に入り込んでいた。中共中央は既に改革開放政策の実行を決定していたが、対ソ政策に関しては大きな変化は起きなかった。中国の指導者たちは、平和的な国際環境を実現するためと称して、実際には多くの外交資源をソ連の脅威への対処に注いだ¹⁵。

牛軍は、当時の中国がソ連との関係改善に踏み切れなかったもう一つの理由を指摘している。それは、改革期の中国が西側の経済モデルの採用に踏み切ったことである。非効率で生産性の低いソ連モデルは捨てなければならない。1978年7月に中国の国务院会議は「向西方学習的方向（西側諸国から学ぶ方針）」を決定した。この時点で、ソ連は学習の対象から外れた。中国の若手幹部と知識人たちは、西側諸国に留学するようになった。この時期に中国の指導者たちの注意を中ソ関係に振り向けるのは難しかった。ソ連から学ぶべきものは何もなくあったからである¹⁶。

2) 米中国交正常化の衝撃

アメリカとの国交回復後、中国の知識人たちは、西側諸国から多くのことを学び始めた。中国へも西側諸国の学生が留学するようになり、文化交流が進展した¹⁷。中国国内では総書記の胡耀邦が「真理の標準」を巡る討論を先導し、メディアでは「社会主義モデルの多様性」についての公開討論が繰り返された。社会主義を論ずる

という枠内ではあったが、中国で比較的自由な言論空間が生まれた。牛軍はこれらの討論の結論を以下の諸点にまとめている。

- ①世界には統一普遍の社会主義発展モデルなど無い
- ②中国もまた「真正的社会主義」を壟断することはできない
- ③他国を何らかの「主義」であると決めつけることもできない

牛軍はこうした認識が自然に中ソ関係の領域にも浸透していった、と分析する。こうした前提に立てば、中ソのイデオロギー論争は無意味なものとなる。胡耀邦ら当時の若手指導者たちは、ソ連とのイデオロギー論争にはもはや意味を見いださなかった。文革も否定された。中国は遂にソ連に対する「修正主義」批判を止めた。イデオロギーが中ソ関係の障害になる時代は終わった¹⁸。

しかし、イデオロギー対立が自然消滅したからといって、中国が対ソ警戒を緩めたわけではない。中国は自国の安全保障を考慮する必要があった。1979年9月に中ソ両国の外交担当者は同盟の見直しに向けた協議を開始した。しかし、協議はソ連のアフガン侵入で中断された。この時期のソ連の対アジア政策もまた中国の対ソ警戒感を高めた。中でも、ベトナムのカンボジア侵攻に対するソ連の支持を中国は強く警戒した。中国はこの時期、次々とソ連に対する対抗措置を採った。モスクワ五輪への不参加、1981年夏の華北での大規模軍事演習、中越国境での「自衛反撃戦」（中越戦争）等である¹⁹。

3) 「独立自主の対外政策」の意味

1982年9月の十二大において中国は中ソ関係を正常化することを決定した。決定の主要な要因は、経済建設のための平和的な国際環境の維持である。十二大の決議が触れなかった要因もあった。1960年代中期以降、つまり中ソ関係の緊張に伴い、中国の国防費は急速に増大し、経済を圧迫していた。1968年には軍事費が国家財政支出の26%を占めた。兵力は1975年に610万に達した。鄧小平は、1975年に軍事工作を担当すると、即座に軍縮に取り組み、1976年には兵力は13.6%減少した。1979年には軍事費は17.3%圧縮された。それでも鄧小平は1980年3月に、「軍事費が多すぎて、国家建設を妨害している」と述べた²⁰。

1977年12月の中央軍事委員会議で鄧小平は、ソ連に対する警戒を緩めてはならない、と述べる一方で、戦争の爆発を先延ばしすることは可能だと発言した。十二大が開催された1982年までに中国の指導者たちは「将来

¹⁴ 牛軍（2010）「告別冷戦」544ページ。

¹⁵ 牛軍（2010）「告別冷戦」544ページ。

¹⁶ 牛軍（2010）「告別冷戦」545ページ。

¹⁷ 当時アメリカに留学中だった筆者は1981年6月から12月まで北京大学に短期留学し、こうした文化交流を体験した。中国政府は北京大学に、アメリカからの留学生を受け入れるための「短期漢語学習班」を設置した。筆者の同級生には後にオバマ政権の財務長官となるティモシー・ガイトナー（Timothy Geithner）がいた。

¹⁸ 牛軍（2010）「告別冷戦」546ページ。

¹⁹ 牛軍（2010）「告別冷戦」546ページ。

²⁰ 牛軍（2010）「告別冷戦」547ページ。

の相当長い時間に亘って大規模な戦争は起こらない²¹という認識を持つようになっていた。つまり、1982年前後になってようやく、中国の指導者たちは、これまで自分たちは「ソ連の脅威」を過大に評価していたと気づいた。

1981年にはレーガン政権が誕生し、レーガンは台湾防衛に対するアメリカの関与を強める姿勢をみせた。中国は対抗措置を採り、中米関係は低調となった。中国の指導者たちはアメリカとは距離を置くことを決定した。十二大（1982年9月）における独立自主の対外政策には、中国の指導者たちが中米関係から学んだ教訓が反映されていた。即ち、ソ連の脅威に対抗するためにアメリカに接近するのは危険だ、という教訓である²²。

ブレジネフは、中米の緊張が高まった1982年3月にタシケントで中国の懸念に配慮するかのような演説を行った。その要旨は以下であった。

- ①ソ連は台湾の主権についての中国の主張を全面的に認める
- ②ソ連は中国の安全を脅かしたことはない
- ③ソ連は中国に対しいかなる領土要求もしたことがない²³

当時の中国の外相、銭其琛によれば、鄧小平はこの演説の2日後、ソ連に対して積極的に反応するよう指示した、という²⁴。鄧小平は、ソ連の出方を探ると同時に、中ソ関係の緩和を利用してアメリカに圧力をかけようとした。

旧来の「冷戦思惟」においては、中米関係と中ソ関係は常にゼロ・サムの関係にあった。しかし、米ソの緊張緩和（デタント）が進行し、ゼロ・サム関係に変化が生じた。今やアメリカだけでなく、ソ連も中国とのデタントを望みだしたのである。中国は中米関係の改善と同時並行して、中ソ関係の改善を図ることができよう。問題はその両関係のバランスと政策実行のタイミングである。

1982年夏、鄧小平は、中米関係と中ソ関係を同時に処理しようと動いた。レーガン政権とは5月に台湾への武器売却をめぐる交渉を開始し、8月17日には「8・17公報」に合意した。アメリカは中国の内政への不干渉を宣言し、台湾への武器供与を段階的に縮小することを約した。レーガン政権はこの公報を忠実に履行しなかった。しかし、中国の指導者たちは「8・17公報」により、中米関係の新しい枠組みができたと考えた。公報

が宣言される直前に、中国外交部のソ連局長がモスクワを訪問し、中ソ関係正常化のための協議を開始した。中国は中ソ関係正常化に向けて本格的に動き出した²⁵。

4) 「三大障害」の提起

ここで問題となるのは、鄧小平がブレジネフのタシケント演説に応じる形で提起したいいわゆる「三大障害：国境地帯からのソ連軍撤兵；アフガン撤兵；ベトナム軍のカンボジアからの撤兵」の意味である。鄧小平はソ連がこれらの具体的な行動を取ることを関係改善の条件とした。実はこの三大障害を鄧小平がいつ、どのような形でソ連側に提示したかは不明である²⁶。ただ、この三大障害の提示が意味したものは明らかである。それは以下の諸点である。

- ①今が対ソ関係改善の好機である。アフガン侵攻で消耗したソ連は対外政策を「調整」せざるを得なくなった。ブレジネフのタシケント演説は、ソ連の弱さの表明である。中米関係は改善に向かっており、これも中国の立場を有利にする。
- ②ソ連とイデオロギー論争はしない。
- ③ソ連は脅威であり続ける。ソ連がアジアで展開している軍事行動は中国に対する直接の脅威である²⁷。

牛軍が指摘するように、確かにこの三大障害にイデオロギー的な言辞はない。これは、従来の中国の対ソ方針の変更であり、一歩前進である。しかし、これら三大障害は協議の最初に持ち出す条件としては「高め」である。なかでも、第二と第三の条件、アフガン撤兵とベトナム軍のカンボジアからの撤兵は、いずれも第三国が絡んだ問題であり、早期の解決は見込めなかった。これらの条件を持ち出したということは、牛軍が指摘したように、中国が依然としてソ連を脅威と考えていたことの証左である。

中国はこの時点ではまだ、旧来の冷戦思惟の束縛から脱していなかった。ソ連のアフガン侵攻やカンボジアへの介入を中国に対する直接的脅威と見做すのは、毛沢東が晩年に提起し、周恩来が喧伝し、鄧小平が同調した「社会帝国主義論」²⁸の核心的主張である。鄧小平はソ連の

²⁵ 牛軍（2010）「告別冷戦」551 ページ。

²⁶ 牛軍（2010）「告別冷戦」557 ページ。

²⁷ 牛軍（2010）「告別冷戦」557-558 ページ。

²⁸ いわゆる「三つの世界論」とその理論的根拠である「社会帝国主義論」については、中国社会科学院の楊奎松が包括的な批判を加えている。楊奎松「中美和解過程中的中方変奏：毛沢東「三個世界」理論提出的背景探析」沈志華 李濱（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』北京 社会科学文献出版社 457-481 ページ。

²¹ 牛軍（2010）「告別冷戦」548 ページ。

²² 牛軍（2010）「告別冷戦」549 ページ。

²³ 牛軍（2010）「告別冷戦」550 ページ。

²⁴ 銭其琛（2003）『外交十記』北京 世界知識出版社 3-4 ページ。

アジアにおける軍事行動を「社会帝国主義論」を持ち出して非難することはしなかった。口には出さなかったものの、鄧小平にとってソ連は脅威であり続けた。

では、牛軍が主張するように、1989年5月の国交正常化の時点で、中国は「冷戦思惟」から完全に脱却したのであろうか。国交正常化の時点でも、「冷戦思惟」からの脱却は不徹底だったのではないか。そして、その不徹底さが中ソ国交正常化後の中国を苦しめることになったのではないか。

陸南泉が関係改善の先行きに楽観的であったのとは対照的に、牛軍は抑制的である。この両者を分けるのはいわゆる「冷戦思惟」の重要性である。陸南泉の分析に「冷戦思惟」はほとんど登場しない。それは過去の遺物として既に廃棄されている。一方、牛軍は「冷戦思惟」が中国の指導層を拘束し続けたと指摘する。

では、ソ連側の事情はどうだったのであろうか。ソ連もまた中ソ関係を改善するため「冷戦思惟」からの脱却を必要としていたのであろうか？あるいはソ連の抱えていた問題は中国とは異なっていたのであろうか？次にソ連の国交正常化に向けた動きを辿ってみよう。

第2節 中ソ国交正常化に向かうソ連

ゴルバチョフは総書記に就任した直後の1985年3月、中国副首相（当時）の李鵬と会見し、北京からの「シグナル」を受け取った。同年、12月にゴルバチョフは再び李鵬と会い、「なかなか意味のある」会話をした²⁹。中ソ蜜月時代にモスクワ動力工科大学を卒業した李鵬は、1987年には首相に昇格し、中ソ関係の実務を担当することになる。

ゴルバチョフがウラジヴォストークで公開演説を行い、アジア・太平洋地域諸国との関係改善を訴えたのは1986年7月であった。この演説で、ゴルバチョフは中国との「善隣友好関係」を樹立するためにあらゆる手段を討議する用意がある、と述べた³⁰。ゴルバチョフが北京からのシグナルを受け取ってから1年半が経過していた。ゴルバチョフが次に中国に関係正常化の意思を伝えたのは、そこから2年経った1988年12月であった。そこから、正常化は急速に進展してゆく。中国からの招待を受けて、1989年2月には外相のシェワルナゼが訪中し、ゴルバチョフの公式訪問の日程を決めた。

政権に就いてから3年の間、ゴルバチョフは対中関係を改善するために、一体何をしていたのであろうか。中

国の指導者たちと同様、「冷戦思惟」から脱却すべく奮闘していたのであろうか。

1. ゴルバチョフ以前

ゴルバチョフの行動を理解するために、ゴルバチョフが登場した時点の中ソ関係がどのような状態にあったのかを確認しておこう。1980年代前半のソ連の対中政策については、コロンビア大学の魏丽莎 (Elizabeth Wishnick) の分析がある³¹。魏丽莎によれば、ソ連の対中政策は1980年代前期にゆっくりと「冷戦構造」を脱し、慎重な和解へと向かっていた。こうした変化は三つの分野で起きた。

1) 両国の境界地区が貿易再開に向けて動き出した

1982年10月にハバロフスクで開催された中ソ貿易協議が中ソ関係改善の先駆けとなった。ハバロフスクは1972年以来、辺界貿易を再開するようモスクワに働きかけていた。1982年に辺境地区を訪問した胡耀邦・総書記は現地の住民たちが辺界貿易の再開を望んでいることを知った。黒河での講演で、胡耀邦は「南深北黒、比翼齊飛（南部では深圳を北部では黒龍江省を翼の両翼とし経済発展を達成する）」と言及し、現地の住民はこの言葉を正月の対聯（正月の門飾り）に掲げた。1983年4月、黒竜江とソ連遠東、内蒙古と西シベリアの間で辺界貿易協定が結ばれた³²。

2) モスクワの指導者たちが対中政策をめぐる議論を始めた

1982年3月のブレジネフのタシケント演説は中ソ政治対話の道を開いた。以後、政権内部の中国脅威論者たちは改革派の攻撃に晒された。対外連絡部と国際部では改革派が台頭した。後にゴルバチョフの外交顧問になるチェルニャーエフ (Cherniaev) らである。しかし、中国脅威論者たちはソ連の中国学者や宣伝機構に対し絶大な影響力を持っていた。チェルニャーエフによれば、中国脅威論者たちは、ブレジネフのタシケント演説後も、公的メディアで執拗に中国を非難し続けた。彼等の職務は毛沢東主義の欠陥を暴露することであり、中ソ関係の正常化は彼等にとっては何のメリットもなかった³³。

アンドロポフの統治期間中、中国との関係改善を支持

²⁹ ゴルバチョフ (1996) 『ゴルバチョフ回想録 下巻』 498 ページ。

³⁰ ゴルバチョフ (1996) 『ゴルバチョフ回想録 下巻』 501 ページ。

³¹ 魏丽莎 (Elizabeth Wishnick) (2010) 「1980年代早期苏联对中国政策延續和变化的压力」 沈志華 李滨 (Douglas Stiffler) 主編 『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』 北京 社会科学文献出版社 507-524 ページ。

³² 魏丽莎 (2010) 「1980年代早期」 507-508 ページ。

³³ 魏丽莎 (2010) 「1980年代早期」 510 ページ。

するエリートたちが増えた。アンドロポフは中ソ関係が決裂する前の1960年代に中央委員に就任しており、長期に亘って中国との関係改善を主張していた。アンドロポフの顧問の一人、ボーヴィン（Bovin）は1983年2月に訪中し、正常化の趨勢は止められないと報告した。しかし、この時点でも保守派が主要な地位に就いており、彼等は中国に対して「慎重な対処」を主張し続けた。彼等は中国の改革は資本主義への回帰であり、中米協調は脅威であると訴えた³⁴。

3) 中米関係が変化し、ソ連指導部は対応に迫られた。

レーガン訪中（1984年4月）後、レーガン政権の対中政策はより積極的になった。ソ連の指導部は中米和解を強く警戒していた。ソ連中央政治局の内部文書は、米中和解の目的は軍事協力であると断言した。中国の和平工作は軍事防衛能力を高めるまでの時間稼ぎであり、見せかけである。中国の現代化は容易に軍事覇権に転化する。大多数のソ連の評論家たちは、レーガンが中国市場への進出を狙い、中国を反ソ同盟に引き込もうとしていると論じた。彼等は米中和解の結果、中国は米の「小伙伴（手下）」となると予想した³⁵。

ソ連の指導部は中国が拘る「三つの障害」を除去してもそこから得られる利益は多くないと考えていた。中国は「三つの障害」がなくなった場合、ソ連に対しどのような譲歩をするかを明言してこなかった。中国が1982年の十二大で、「独立自主の外交方針」を唱えても、ソ連の守旧派の評論家たちは中国の外交路線は不変であると主張していた。彼等は、毛沢東の遺産、中でも「反ソ・反覇権」政策とそこから派生した国際共産党運動（国際共運）の分裂工作を忘れていなかった。ソ連の守旧派は中国の「独立自主宣言」は中国の策略だと断定した³⁶。

アンドロポフは対中政策の評論を解禁した。しかし、メディアの封鎖は続いていたため、改革派の見解は極めて曖昧な形でしか表明されなかった。1983年には一部の学者が中国の対外開放政策の効果について言及し始めた。中国が開始した外資導入政策と合資企業の設立が大きな成果を挙げつつあったからである。しかし、大多数の学者は50年代以来の彼等の見方を変えなかった³⁷。

2. ゴルバチョフ以後

ゴルバチョフがトップの座に就いた（1985年3月）時点では、多くのソ連学者が1978年以来の中国の経済

発展に気付いていた。しかし、ソ連の学者にとって、気づくことと、政治的リスクを冒してその「気づき」を公表することとは別である。ゴルバチョフが認めるように、中ソ間には「ほとんど30年にわたる疎遠と対立の間に蓄積した大小さまざまな障害の山」³⁸があった。困難な問題は先送りされる。それは、国際社会において普遍的な現象である。

1) 対外政策策定・執行組織の改編

ゴルバチョフにとって、中国との国交正常化は最重要課題ではなかった。西側諸国との全面的緊張緩和（デタント）が喫緊の課題であり、冷戦を終結させるための必要条件であった。西側との全面的デタントはソ連の対外政策の大きな変更であり、そのためには大規模な対外政策策定・執行組織の改編が必要だった。ゴルバチョフは就任直後から対外政策策定・執行組織の改編に着手した。対中政策を独占していた党と政府組織もこの大規模リストラのあおりを受けて改編されていた。

ソ連において、「冷戦思惟」からの脱却は上から、短期間に、組織的に、かつ劇的に進行した。「冷戦思惟」を捨てない幹部たちは解任され、彼らに替わって「新思惟」を旗印とするゴルバチョフとその側近たちが対中政策策定・執行のイニシアチブを握った。

ノッティンガム大学のロシア研究者、ラドチェンコ（Sergey Radchenko、中国名：谢拉钦科）はソ連の政策策定・執行組織と幹部の改編が対中政策をどのように変えたのかを詳細に辿った³⁹。ラドチェンコによれば、ゴルバチョフが前任者から引き継いだのは、混乱し、複雑化していた外交機構であった。最終決定権は政治局が握っていた。チェルネンコ死去の時点で政治局員は10名、候補委が6名であった。政治局は政府よりも上位にあった。グロムイコ（Andrei Gromyko）は1957年以来外交部長であったが、政治局員になったのは1973年のことであった。ゴルバチョフが書記長に就任した時点（1985年3月）では、グロムイコが政治局で最大の影響力を持っていた⁴⁰。

中国問題を担当していたのは工入党連絡部であった。工入党連絡部第一副部長のラフマーニン（Oleg Rakhmanin）は有力な学者・官僚であり、党連絡部は

³⁸ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』498ページ。

³⁹ 谢拉钦科（Sergey Radchenko）（2010）「ソ連外交機構の幹部更替と対華政策転変 1985～1986」沈志華 李滨（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』北京 社会科学文献出版社 2010年 525-537ページ。

⁴⁰ 谢拉钦科（2010）「ソ連外交機構」525ページ。

³⁴ 魏丽莎（2010）「1980年代早期」511ページ。

³⁵ 魏丽莎（2010）「1980年代早期」514-515ページ。

³⁶ 魏丽莎（2010）「1980年代早期」513ページ。

³⁷ 魏丽莎（2010）「1980年代早期」517-519ページ。

対中政策に影響を与え続けた。ラフマーニンは中ソ関係の正常化に懐疑的であった。ラフマーニンが書いた中ソ関係報告(1971)は、中国の「大国沙文主義(大国ショーヴィニズム)」と反ソ政策を厳しく批判し、ソ連における権威的参考書となった。ラフマーニンの見解は社会主義陣営が毎年開催する中国問題的官方会議(Interkit)で関係各国に伝達された。この会議は20年以上続けられた。ソ連の「不変の真理」が同盟国に伝達され、陣営内の言論を拘束した⁴¹。

2) ゴルバチョフの側近たち

1983年5月、1,000人近い職員を抱えるソ連最高のシンクタンク、ソ連科学院世界経済和国際関係研究所は新所長を迎えた。後にゴルバチョフ改革の設計者となるヤコフレフ(Aleksandr Iakovlev)である。ヤコフレフは中央宣伝部の幹部であったが、1973年に「隠れた権力闘争」に破れ、カナダ大使に左遷されていた。1983年にゴルバチョフがカナダを訪問し、ヤコフレフと意気投合した。ゴルバチョフはヤコフレフを中央に抜擢し、自己の顧問とした。ヤコフレフは1985年7月には研究所を離れ、ソ共中央書記となり、最終的に政治局委員となった⁴²。

米国・カナダ研究所長のアルバトフ(Georgii Arbatov)はブレジネフのブレインとして、タシケント演説を起草した。アルバトフはブレジネフだけでなくアンドロポフともゴルバチョフとも友好的関係を持ち、そのため1980年代には米国・カナダ研究所の影響力が増大した。

アルバトフがゴルバチョフの対中政策について、具体的にどのようなアドヴァイスをしていたかを垣間見ることの出来る資料が存在する。対外政策部でポノマレフの部下であり、アルバトフの友人でもあったチェルニャエフが詳細な日記を残していたのである。1985年4月11日の日記によれば：アルバトフはゴルバチョフと頻繁に連絡をとり、2週間に渡したメモの数は41に及んだ。メモの内容は「ソ連は米国と離れてもやっていけるが、西欧と離れることはできない；ゴルバチョフはブレジネフやチェルネンコのように大衆に媚びを売るべきではない；中国との友好は推進すべき；日本との関係を改善するために、二島は返還してもよい；アフガン戦争は終わらせなければならない；衛星国との関係は根本的に見直すべき」といったものであった⁴³。

アルバトフは1985年10月に2週間中国を訪問し、中ソ文化交流事業を行った。同時期、米の副大統領 G.W. ブッシュが訪中していた。当時、米中は台湾への武器供

与をめぐって対立を深めていた。アルバトフは帰国後、ソ連のテレビ番組に出演し、今が中ソ関係改善のチャンスだと訴えた。同時に、アルバトフはゴルバチョフに詳細な報告書を提出した。報告は中国の改革の進展を賞賛し、ソ連の改革の停滞を指摘した。中でも、アルバトフが強調したのは、当時の中国の消費生活の豊かさであった。ソ連が中国経済に参入するのは難しかった。ソ連製商品の質が劣悪だっただけでなく、ソ連側の手続きが煩瑣だったからである。アルバトフが期待をかけたのは、中国で輸入が急増していたハイテク部門であった⁴⁴。

3) 「反中分子」の排除

工人党連絡部で対中国政策の実務を取り仕切っていた第一副部長のラフマーニンはソ共中央委における「反中分子」の代表であった。1985年6月21日のブラウダにラフマーニンは仮名を使って論文を発表した。この論文は所謂民族主義趨勢(連邦共和国における独立運動)を厳しく批判するものであった。この論文は西側の注目を浴びた。ゴルバチョフの言説とあまりにも離反していたからである。ゴルバチョフは東独のホーネッカーとハンガリーのカダールに電話し、この論文はソ連を代表していないと弁解せざるを得なかった。ゴルバチョフは7月29日の政治局会議で、誰がこの論文の掲載を決定したかを問い詰めた。ポノマレフら、政治局員は責任逃れに終始した⁴⁵。

ラフマーニンは現職に留まったが、彼の上司は「整理」された。1986年2月にはルサコフが解任され、後任にはメドヴェージェフ(Vadim Medvedev)が就任した。メドヴェージェフは中央委科学教育部の出身で、外交経験は皆無であった。彼の任務は社会主義陣営にゴルバチョフの「新思惟」を広げることであった。1986年末、ラフマーニンは退任した。メドヴェージェフは回顧録で、以下のようにラフマーニンを批判した。「ラフマーニンは早い時期に中国への見方を固定させた。中国は覇権主義であり、大国ショーヴィニズムであり、反ソであり、強国になろうという野心を持っているという見方である。彼はこうした過去の観点を堅持し、幹部に教条主義を持ち込んだ。」1985年以後、ラフマーニンの部下たちは次々と解任された。ラフマーニンの弟子、チタレンコ(Mikhail Titarenko)が所長を務める遠東問題研究所には多数の中国問題専門家がいたが、彼等のほとんどが姿を消した⁴⁶。

⁴¹ 谢拉钦科(2010)「ソ連外交機構」526ページ。

⁴² 谢拉钦科(2010)「ソ連外交機構」528ページ。

⁴³ 谢拉钦科(2010)「ソ連外交機構」529ページ。

⁴⁴ 谢拉钦科(2010)「ソ連外交機構」530ページ。

⁴⁵ 谢拉钦科(2010)「ソ連外交機構」532-534ページ。

⁴⁶ 谢拉钦科(2010)「ソ連外交機構」534-535ページ。

4) 外交機構の「整頓」

ラフマーニンが去り、中ソ関係の正常化を妨げる組織的障害はなくなった。対外政策部のポノマレフも職を去り、後任には永らく駐米大使を務めたドブリニン (Anatolii Dobrynin) が就いた。ドブリニンは党務経験がなく、対外政策部が主管する第三世界での経験もなかった。しかし、ゴルバチョフにとってこの人事は重要であった。ゴルバチョフは対外政策部の地位を高め、外交部を牽制しようとしたからである。レーガン大統領らと面識があり、モスクワよりもワシントンで有名なドブリニンはまさに適役だった。

1986年初期の人事異動で、ゴルバチョフの外交顧問も替わった。ブレジネフの外交顧問だったアAGENTフ (Andrei Aleksandrov-Agentov) は、チェルニャーエフに交替した。チェルニャーエフは対外政策部でポノマレフの部下であり、アルバトフの友人でもあった。チェルニャーエフの抜擢にはアルバトフとヤコフレフが関与していた。ヤコフレフはイデオロギー担当の中央委書記に就任し、世界経済和国際関係研究所長の後任にはプリマコフ (Evgenii Primakov) が就いた。永年務めた外交顧問の地位を明け渡したアAGENTフは、こうした一連の動きを、「ゴルバチョフは自分と意気投合した連中—ヤコフレフ、メドヴェージェフ、チェルニャーエフ—とばかりつきあっている」と表現した⁴⁷。

こうした劇的変化を準備したのは1985年7月のシュワルナゼ (Eduard Shevardnadze) の外相就任であった。シュワルナゼに外交経験はなかったが、ゴルバチョフは外交部からグロムイコの影響力を一掃することを重視した。シュワルナゼは膨大な外交官僚機構の改革に取り組むことになった。

ゴルバチョフがウラジヴォストークで公開演説を行い、アジア・太平洋地域諸国との関係改善を訴えた1986年7月は、まさにこうした新体制が成立した時期であった。それでもなお、国交正常化まで更に3年を要した。その最大の原因は鄧小平が最後まで拘った「三大障害」の存在である。1989年5月の会談でこの3年という時間に言及した鄧小平に対し、ゴルバチョフは「あなたは「三つの障害」の除去という問題を提起しました。だから、三年かかったのです。言ってみれば、一つの障害を取り除くのに一年ということですね。」と皮肉を混じえて言及した⁴⁸。

このゴルバチョフの主張は一面的ではあるが、事実である。確かに、ゴルバチョフはソ連の都合で実施した諸策、即ちアフガニスタンからの撤兵 (1988.5~1989.2)、

モンゴルからの撤兵、カンブチアでの平和協議、をあたかも中国の要求への対応であるかのように脚色している。しかし、ゴルバチョフの口調には、これらの諸条件をクリアしたのは「新思维」に基づいて行動した自分であるという強い自負が漲っている。

一方、ソ連にとってもまた「冷戦思维」からの脱却は簡単にはいかなかった。それは、中国よりも難しかったかもしれない。ゴルバチョフが権力を握ったのは1985年3月であり、中ソ国交正常化にまで漕ぎ着けるには4年の時間しかなかった。ブレジネフの死 (1982年11月) は毛沢東の死 (1976年9月) の6年後であった。鄧小平ら改革派が権力を掌握したのが1980年2月であるから、ゴルバチョフにはちょうど5年の遅れがあった。鄧小平らは9年かけてようやく1989年5月に「冷戦思维」からの脱却を一応達成した。ゴルバチョフは5年遅れで改革を始め、4年間で「冷戦思维」からの脱却を一応達成した。こうした速成脱却を推進してきたソ連の対外政策新体制は、以下の2つの問題を抱えていた。

まず、新体制には「伝統的価値観」すなわち「冷戦思维」の持ち主が依然として存在していた。KGBも国防部も対外関係に組織的利害を持っていた。外交部は自己の組織的利害を守ろうとした。ゴルバチョフの組織改変は劇的で大規模なものであったが、それは組織の「整頓」であり、反対勢力の「粛清」ではなかった。グロムイコは外相のポストから体よく追い出されただけであり、彼の「冷戦思维」を捨て去ったわけではない。ゴルバチョフはこのように思想的に混乱し、組織利害が錯綜した外交機構を相手にしなければならなかった⁴⁹。

ソ連の新体制が抱えていた、より本質的な問題は「新思维」の具体的な中身である。冷戦から脱却したソ連はどこに向かうのか。どんなソ連を目指すのか。社会主義はそして共産党はどうなるのか。「新思维」の具体的な中身について、ゴルバチョフと側近たちとの間には意見の違いがあった。時と共にその違いは拡大し、表面化した。1990年になると、政治改革の深度と速度を巡ってゴルバチョフと側近たちは対立するようになり、ソ連の対外政策新体制は内部から瓦解していった。

第3節 1989年5月の北京

1989年5月15日午前、ゴルバチョフは北京空港に到着した。飛行中に航空無線で歓迎行事は空港で行われることが通知された。天安門広場は「五・四運動」を記念するという名目で集まった学生たちによって占拠されていた。空港には楊尚昆・国家主席が出迎えた。ゴルバチョフは天安門広場の中央にある革命英雄記念碑に花輪

⁴⁷ 谢拉钦科 (2010)「ソ連外交機構」535-536 ページ。

⁴⁸ ゴルバチョフ (1996)『ゴルバチョフ回想録 下巻』504 ページ。

⁴⁹ 谢拉钦科 (2010)「ソ連外交機構」536-537 ページ。

を捧げることを望んでいたが、その要求は入れられなかった。「中国の指導部はどうやら、ゴルバチョフが天安門に姿を見せれば状況をいっそう煽り立てるのではないかと恐れたらしい。」⁵⁰とゴルバチョフは後に回顧している。

一連の会談は予定通りに進行した。まず、楊尚昆・国家主席との会談が行われた。楊尚昆はいわゆるソ連留学組であり、若き日のソ連との出会いを簡単なロシア語で話したという。続いて李鵬・首相との会談が行われた。李鵬とは両国が通商・経済・技術交流の分野で協同作業に取り組むことで合意した。また、中ソ国境に配備された兵力の削減についても合意した。

5月16日の朝、人民大会堂で鄧小平との会談が行われた。ゴルバチョフの回想録によれば、当時85歳の鄧小平はメモを一切見ずに、自由かつ活発に発言したという。この会談での鄧小平の発言の一部が後に公開され、それは事実上の公式見解となった。本章の冒頭に引用した、「過去を閉じ、未来を開く」がそれである⁵¹。

では、ゴルバチョフもまたこの鄧小平との会談が今回の訪中のクライマックスだと考えていたのだろうか。どうもそうではないらしい。確かに鄧小平はゴルバチョフと握手を交わし、中ソ関係の正常化を宣言した。しかし、国交正常化が国際社会に認められるためには、ゴルバチョフは正式な交渉相手である中共総書記の趙紫陽と会わなければならない⁵²。目の前にいるこの元氣な老人は、中国の最高政策決定者のようだが、一体何を考えているのか。

握手に続く鄧小平の発言をゴルバチョフは「かなり唐突な展開」と受け取った。鄧小平が突然「マルクス主義とレーニン主義について少し話したい」と言い出したからである⁵³。鄧小平が語った「過去」は以下の3点にまとめることができる。

1) 1960年代に鄧小平が繰り広げた中ソ論争は空論で

あった。

2) 中国は過去に一連の大国から大きな被害を被った。それらの大国とは英国、ポルトガル、日本、帝政ロシア、そしてソ連である。

3) 過去の30年間、中国はソ連に対して不平等な立場におかれ、軽視され、圧迫されてきた。

ゴルバチョフの反応は以下のとおり。

1) 同意。

2) 遠い過去については、すでに歴史の問題である。歴史は書きかえられない。

3) あまり遠くない過去に、いくつかの点で我々は我々の側の明確な誤りと責任を感じている⁵⁴。

これらの論点のうち、鄧小平が一步踏み込んで、「結論」を引き出したのは1)の中ソ論争であった。鄧小平が言ったとされる「結論」は以下である。この「結論」は中国の公式文献には登場しない。

「われわれ両国は社会主義建設事業でそれぞれ固有の具体的な条件を考慮することを必要と認める。既成モデルは存在しない。」⁵⁵

ゴルバチョフは、「ここにわれわれは完全な相互理解を確認することができます。」と応答し、続けて鄧小平が「過去を閉じ、未来を開く」という成句を提言したとなっている。

この鄧小平の発言（それが本当にあったという前提で）は平明な言葉では以下を意味する。

①両国は相手国に対しイデオロギー批判をしない。

②両国は複数の社会主義の存在を認める。

③両国が固有の問題を抱えていることを互いに理解する。

両国がこの時点、即ち1989年5月時点で、互いの改革政策を容認したことの意味は大きい。今後ゴルバチョフがどのような政策を打ち出しても、それを中国が「資産階級自由化」と非難することはない。同様に、鄧小平らの政策をソ連が「修正主義」と批判することはない。

この合意を「未来に一步踏み出した」と表現するのはやや大袈裟である。何故なら、両者は少なくとも明示的には、未来に関しては何も話していないからである⁵⁶。しかし、ここでは暗示的な合意があったとみるべきであろう。合意のポイントは両国が「包括的な相互不干渉」を手に入れたことにある。この合意が果たした役割については次節で触れる。

⁵⁰ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』502ページ。

⁵¹ 鄧小平（1993）「結束過去、開壁未来」『鄧小平文選 第三巻』291ページ。

⁵² 趙紫陽が失脚後に公開された非公式の談話によれば、この鄧小平・ゴルバチョフ会談を外交手続き上どう位置付けるかについて、中国側には混乱があった。当初鄧小平との会見を「低調処理」する予定であったのを、直前になって鄧小平がゴルバチョフとの会談で両党関係の回復を宣言すると言い出したという。趙紫陽（2007）『趙紫陽軟禁中の談話』宗鳳鳴 記述 香港 開放出版社 255ページ。

⁵³ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』504ページ。

⁵⁴ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』506-508ページ。

⁵⁵ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』506ページ。

⁵⁶ 鄧小平（1993）「結束過去、開壁未来」『鄧小平文選 第三巻』295ページ。

歴史的過去について、両者の観点はすれ違ったままである。ただ、この点に関しては鄧小平が妥協した。鄧小平は「歴史の問題に私がふれたのは、終止符を打つためです。これらの問題は風に吹き飛ばさせましょう。」⁵⁷と提案し、討論を打ち切った。

中ソ関係の「あまり遠くない過去」の諸問題については、ゴルバチョフが妥協した。ゴルバチョフは最も曖昧な形で、「いくつかの点で・我々の側の明確な誤り」を認めた。中ソ両国は、時々間違いを犯す「普通の国」になった。

ゴルバチョフは「過去」に拘る鄧小平に些かうんざりした形跡がある。ゴルバチョフは中ソ論争について話し出した鄧小平に対し、「私はあなたとスースロフの間で交わされた討論をよく覚えています。」⁵⁸と切り返し、遠い昔の思い出話を打ち切ろうとした。フルシチョフ時代を経験したゴルバチョフにとって、中ソ論争は不幸な歴史の一コマに過ぎない。今話すべきは現在と未来である。ゴルバチョフが念頭に置いていたのは政治的対話、経済関係、技術・文化交流、要員養成等についての協議であった。しかし、ゴルバチョフの見るところ、鄧小平にはこのような問題を具体的に討議する準備はできていないようだった。しかも、会談は既に2時間以上におよんでいた⁵⁹。

ゴルバチョフが後に「歴史的」な意味を持つと評価したのは、趙紫陽・中共総書記との会談であった。過去に終始した鄧小平との会談とは対照的に、両者は現在と未来について、即ち改革について話したという。会談が行われていた人民大会堂の外では、学生たちが国の指導者たちとの直接対話を要求していた。改革はまさに焦眉の問題であった⁶⁰。

ゴルバチョフによれば、中国側との会談はすべてテレビ・ラジオ用に収録されたという。これらの会談は結局公開されなかった。公開を意識していたせいか、ゴルバチョフの回顧録に登場する趙紫陽は終始冷静で、用心深い発言を繰り返している。ゴルバチョフの回顧録によれば、趙紫陽は会談の冒頭で、鄧小平との会談が「首脳会談」であり、今回の訪中の「頂点」であると言及した。次いで、重要問題は鄧小平の指導を仰がねばならぬという「実に重要な公式決定が（党中央委で）採択された」

と伝えたという⁶¹。

趙紫陽はこうした用心深さにも拘らず、ゴルバチョフとの会談の直後の5月20日には事実上解任されてしまった。解任が公表されたのは6月23日である。鄧小平は後に解任の理由を、胡耀邦と趙紫陽の二人の総書記は「資産階級自由化問題で躓いた」⁶²からだと説明した。では、趙紫陽とゴルバチョフとの会談にそのような「躓き」はあったのだろうか。

躓きは少なくとも三つあった。

①趙紫陽が「民主主義の条件の中で活動することを学ぶ必要」を認めたこと。ゴルバチョフによれば、趙紫陽は不意にある提案を持ち出したという。

「わが国では天安門にたくさんの民衆が集まっています。どうでしょう、シェワルナゼ同志にそこへ行って、無政府状態の広場を説得していただけませんか？」

趙はこれを冗談めかして言ったが、私にはまったく真剣なように思われた⁶³。

この提案をシェワルナゼはやんわりと拒否した、と言われる。この発言記録を目にした鄧小平ら長老たちは趙紫陽の優柔不断に憤慨したことであろう。党の長老たちは北朝鮮を訪問していた趙紫陽の留守中の4月25日に天安門での運動を「動乱」と決定していた。

②「政治改革なしには事態は動かぬこと、それに国民を広く惹きつけなければならないこと、」を強調したゴルバチョフに趙紫陽が同意したこと。

③「多党制の問題」に触れたゴルバチョフに対し、趙紫陽が理解を示したこと。

ゴルバチョフは趙紫陽の率直さに驚いたと回顧している⁶⁴。

趙紫陽との率直な会話の内容、中でも民主化の必要性、が国交正常化の合意文書に盛り込まれることはなかった。両国は1989年5月時点の二国間関係を固定することに合意した。両国の未来へのアプローチ、具体的には政治改革への取り組み、については相互の不干渉が暗黙のうちに了解された。

⁵⁷ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』508ページ。

⁵⁸ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』505ページ。

⁵⁹ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』508-509ページ。

⁶⁰ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』509ページ。

⁶¹ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』509ページ。会談で趙紫陽が鄧小平の「権威」を強調したことは、趙紫陽も認めている。趙紫陽（2007）『趙紫陽軟禁中の談話』49-50ページ。

⁶² 鄧小平（1993）『堅持社会主義、防止和平演變』『鄧小平文選 第三巻』344ページ。

⁶³ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』510ページ。

⁶⁴ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』514ページ。

第4節 中ソ国交正常化の機能

中ソ国交正常化が達成したのは以下のような「関係性」である。

1) 非イデオロギーの関係

非イデオロギーの関係は両国が「過去」を封印することによってもたらされた。両国が1989年5月の時点で過去を封印することができたことは、大きな幸運であった。ゴルバチョフはその政策スタッフを改革派で固め、西側諸国とのデタントは順調に進展していた。改革を唱え、権力の頂点にあったゴルバチョフが「過去」即ちスターリン、フルシチョフ、ブレジネフを「清算」することは容易であった。

この時点の中国もまた、いわゆる改革・開放路線のピークにあった。改革派の趙紫陽が頂点に立ち、西側諸国との関係改善は順調に進んでいた。残された課題である中ソ国交正常化は事実上半ば達成されていた。「三大障害」が消滅に向かっていてからである。それでもなお、ゴルバチョフ訪中は歴史的出来事として演出されねばならなかった。両国とも首脳会談の持つ政治的効果に期待していた。中国が政治的コストをかけずに切れるカードは過去の封印であり、そのカードを切れるのは鄧小平以外にはいなかった。毛沢東に少々虐められてきた鄧小平だからこそ、毛沢東という過去を「清算」できたのである。

いわゆる天安門事件後、中国の「冷戦思惟」はいとも簡単に復活した。鄧小平は1989年11月の談話で、以下のように発言した。

「一つの冷戦は終結したが、二つの冷戦が始まった。一つは第三世界における冷戦で、もう一つは社会主義に対する冷戦だ。西側諸国は硝煙の立たない第三次世界大戦を始めた。この戦争は硝煙が立たない。それは彼らが社会主義国を平和的に転覆しようとしているからだ。(和平演変)」⁶⁵

資産階級自由化問題とは平明な言葉では民主化である。では、ソ連国内で民主化を推進し、5月の会談で趙紫陽と意気投合したゴルバチョフは、資産階級自由主義者ではないのか？

鄧小平の言い分をよく見ると、この新たな冷戦からソ連が除外されていることに気づく。鄧小平によれば、過去の冷戦は覇権主義の大国、即ちアメリカとソ連の争いであった。しかし、新たな冷戦で中国・第三世界と対立するのはG7に代表される西側諸国である⁶⁶。ここでは、ゴルバチョフがG7諸国のリーダーたちと同じような、

あるいはそれ以上の、資産階級自由思想を持っていたかもしれないことは不問に付されている。

この鄧小平の言説は、天安門事件に対するゴルバチョフの対応に呼応したものであった。事件直後の6月6日、ゴルバチョフはソ連人民代議員大会で報告を行い、北京の事件に関して遺憾の意を表し、被害者に哀悼の意を表した。同時に「英知と良識とよく考慮された対応が勝ちを制し、今の事態について偉大な中国民族にふさわしい解決策が見出されることへの期待を表明した。」⁶⁷ ソ連が天安門事件を理由に、対中制裁を課すことはなかった。ゴルバチョフは天安門事件を「悲劇」と表現したものの、中国の国内問題には干渉しないという姿勢を貫いた。

2) 相互不干渉の関係

ゴルバチョフは趙紫陽失脚のニュースを冷静に受け止めた。趙紫陽が学生たちに同情的だったことは事実であったし、党の長老たちが趙紫陽に批判的だったことも自明であった。さらにゴルバチョフが趙紫陽の失脚を知らされていた可能性もある。5月の訪中の最後に、ゴルバチョフは上海を訪問し、上海市委第一書記の江沢民と市長の朱鎔基と会っていた。ゴルバチョフによれば、江沢民が新しい波の重要な指導者の一人だという情報がモスクワに入っていたと言う⁶⁸。新しい波とは国交正常化後の新たな経済関係を意味した。1950年代にモスクワでの技術実習に参加し、党長老たちの信頼も厚い江沢民は、趙紫陽の後継者として「理に適っている」とゴルバチョフは受け取った。

1990年4月、首相の李鵬がソ連を公式訪問した。李鵬は前年のゴルバチョフ訪中時の非礼を詫びた。李鵬は当時の中国は「実に不安定な状態にあった」と認めた上で、そうした中で実現した国交正常化は「歴史的意義がある」とした⁶⁹。続けて李鵬は、今回の訪問の目的は両国関係の未来を開くことにあつたとした。会談では航空機製造の協力、軍事技術の移転、軍の交流拡大等が話されたという。この会談で李鵬は「二つの改革（経済改革と政治改革）は複合的に行わなければならぬ」と話したと言う⁷⁰。

⁶⁶ 鄧小平（1993）「堅持社会主義、防止和平演變」『鄧小平文選 第三卷』345 ページ。

⁶⁷ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』520 ページ。

⁶⁸ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』516 ページ。

⁶⁹ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』521 ページ。

⁷⁰ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』522 ページ。

⁶⁵ 鄧小平（1993）「堅持社会主義、防止和平演變」『鄧小平文選 第三卷』344 ページ。

この発言は、当時のソ連の政治状況を考えてみると、かなり踏み込んだ発言だったといえよう。李鵬は、政治改革の必要性を認めることで、中国がソ連の内政に干渉しないと言う立場を表明した。1989年5月の時点では、政治改革の必要性を力説したのはゴルバチョフであった。当時のソ連は、まだ中国ほどには「不安定な状態」にはなかった。しかし、ソ連の安定は表面的で一時的なものであった。

ゴルバチョフが訪中する直前の1989年3月には初の自由選挙となる人民代議員の選挙が実施され、エリツィン、サハロフ、ポポフらが選出された。ゴルバチョフが帰国した直後の5月末には第一回の人民代議員大会が開催された。それは、天安門の「反政府暴乱」を鎮圧した中国とは対照的であった。西側諸国はゴルバチョフのペレストロイカを歓迎し、支持した。12月にブッシュ大統領とゴルバチョフはマルタで首脳会談を行い、東西冷戦の終結を宣言した。トップの座に就いて4年でゴルバチョフはその最大の外交目標、冷戦の終結を達成した。1990年10月、ゴルバチョフはノーベル平和賞を受賞した。

一方、鉄の団結を誇っていたソ連は徐々に解体に向かっていた。1989年8月には多数の東ドイツ市民がハンガリー経由で西ドイツに脱出するという事件が発生した。11月には東ドイツが国境を開放し、東ドイツ市民は直接西ドイツに流れ込んだ。東西冷戦の象徴であった「ベルリンの壁」は崩壊した。

1990年には中ソ両国の政治状況は逆転していた。今度ソ連が「きわめて容易ならぬ時代」⁷¹を迎えていたのである。ソ連国内では民主化をめぐる左右の対立が先鋭化した。1990年2月、ゴルバチョフは遂に政治改革の頂点ともいえるべき「プロレタリア独裁」の放棄に着手した。1990年2月、ソ共中央委員会総会は一党制の憲法上の根拠となっていた第6条の修正に合意し、一党制原則を放棄した。3月のソ連人民代表大会は、第6条を修正し、ソ連は多党制の国家となった。

このような状況の中で、中国の首相が「政治改革の必要性」について言及したことは、ゴルバチョフにとっては一つの安心材料であったろう。但し、中国をはじめとした各国が干渉はしてこないものの、ソ連の政治改革の行方を注意深く見守っていたことも確かである。

1991年5月には総書記の江沢民が訪ソし、ゴルバチョフは彼を「よき知人」として迎えた。両国は中ソ関係を継続的に発展させていくことに合意した。当時、中国共産党は党内部の非公開討論で、ゴルバチョフのブルジョア自由主義を厳しく批判していた⁷²。中でも、ソ連が「プ

ロレタリア独裁」を放棄し、その結果ソ連共産党からの脱党者が激増していることに中国は危機感を募らせた。

しかし、江沢民はそのような内部討論が行われていることをおクビにも出さず、「ソ連の改革が実行され、成功するよう希望し、それこそがソ連の安定の強化と最も直接的に結びついているという自分の考えを力説した。」⁷³ 中国の内部討論が公開されることはなかった。

確かに、中ソ論争の「過去」は風に飛ばされたのである。

3) 対等な関係

中国にとって、中ソ関係の「過去」は不平等と差別に満ち溢れたものであった。鄧小平はゴルバチョフとの会談で論点の3)としてこの問題を提起した。それに対し、ゴルバチョフは「ある時期に、いくつかの問題でソ連は間違いを犯した」と回答し、この問題に決着がつけられたのは上に見てきたとおりである。

差別の解消は、それまで差別されてきた側により大きな変化を促すことになる。では、この時点(1989年5月)で解消された差別とは何か。以下の3点である。

①イデオロギーのヒエラルキー

鄧小平の年代の中国の指導者たちは、ソ連に対する劣等感を払拭できなかった。それは、彼らがソ連を社会主義思想の本家かつ、社会主義革命の先達として認めてきたからである。この劣等感を「風に吹き飛ばしてくれた」のはゴルバチョフである。ゴルバチョフはスターリン、フルシチョフ、ブレジネフという「過去」を吹き飛ばしてくれた。これで、中国が毛沢東を吹き飛ばせば、中国を思想的に拘束するものは何もない。マルクス・エンゲルスは過去の歴史的人物であるから、どうにでもなる。彼らの古典を現代的に、あるいは中国的に解釈すれば良い。

以後、中国は思想的なアクロバットを次々と演じていく。今や、社会主義にタブーはない。「社会主義市場経済」とか、「中国の特色を持つ社会主義」とか、「和諧社会」とか、「共同富裕」といったユニークではあるが、どこか既視感を伴う概念が次々と登場している現在は、社会主義思想の「百家争鳴」状態にある。

⁷¹ ゴルバチョフ(1996)『ゴルバチョフ回想録 下巻』520ページ。

⁷² そうした批判の一端は、2000年代初頭に相次いで出版されたソ連解体についての研究書で明らかにされている。例えば、張樹華(社会科学院政治学研究所長)(2012)「蘇共敗亡的過程、原因与教訓」李慎明(社会科学院副院長)主編 張樹華等译『親歷蘇聯解体 二十年後的回憶与反思』269-283ページ。

⁷³ ゴルバチョフ(1996)『ゴルバチョフ回想録 下巻』522ページ。

②政治改革優先思想

ゴルバチョフが、趙紫陽と政治改革に関して語る時、そこにはソ連の「上から目線」を感じることができる。この「上から目線」の理由は以下である：鄧小平がくだくだと話した教条主義の問題を、ソ連はとっくに克服している；改革に反対する保守派は「整頓」した；いわゆる「三大障害」はいずれもクリアした；趙紫陽は民主化の必要性を理解しているようだが、無理解な老人たちを説得できないでいる；ソ連は政治の民主化に既に取り組んでいる；中国の経済発展は目覚ましいようだが、この天安門の騒ぎは何事だ。

鄧小平らとの会談を経て、ゴルバチョフは中国で政治改革を優先させるのは無理だと気づいた。まず、ゴルバチョフは改革派の代表である趙紫陽が最終決定権を握っていないらしいことに気づいた。ゴルバチョフは鄧小平と趙紫陽と二度も国交正常化を宣言せねばならなかった。次に、その趙紫陽は政治改革の初期的段階である、党と政府の機能の分離（党政分離）の実現にすら苦労していた。そして、最後に天安門である。

ゴルバチョフは中国が政治改革を「一時停止」することを認めざるを得なかった。但し、その見返りとして、ソ連の政治改革に中国が口出しすることがあってはならない。こうして、中ソ国交正常化は政治改革に関する相互の不干渉という形で、両国関係の対等性を担保した。

③経済改革優先路線

ゴルバチョフは経済改革に関しては中国がずっと先を走っていることをよく理解していた。趙紫陽が中国の農村改革を先導し、その実績を買われてトップの座に就いたことも知っていた。ゴルバチョフは回顧録で、趙紫陽が改革の方向、規模、深さ、変革のテンポについて語っている時、「私の眼前には自分の国の姿がずっと浮かんでいた。」⁷⁴と述べている。かつて、農業担当相であったゴルバチョフの眼には、最も基礎的な生産の自主権すら持っていないソ連の農民の姿が浮かんでいたことであろう。

しかし、ゴルバチョフは中国の成功経験から学ぶつもりはなかった。何故ならば、ソ連では「政治的惰性」⁷⁵が強過ぎて、経済改革の芽がことごとく摘まれてしまうからである。更に、ゴルバチョフの見るところでは、中国の経済改革は十分な広がりを見せていない。多数の北京市民が現在の生活に不満を持っている。だから彼らはその不満を表明するために天安門に集まっているではないか。

⁷⁴ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』512 ページ。

⁷⁵ ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』519 ページ。

ゴルバチョフは中国の経済改革優先路線を評価したが、それを礼賛し、後を追うことはしなかった。しかし、同時にその路線を批判することも差し控えた。中国には固有の問題があるのであるから、独自の取り組みをすることは自由であり、それをソ連は尊重する。同じように、ソ連は固有の問題に独自のやり方で取り組んでいく。ここでも、1989 年 5 月時点の両国の対等性が固定され、担保された。

1989 年 5 月を境として、中ソ両国はそれぞれ大きな混乱に巻き込まれていった。国交正常化がもたらした「普通の関係」は、そうした混乱の中で両国を繋ぎ止める「底線」として機能した。1990 年初頭の段階では、この「底線」はまだ細く、頼りないものであった。

この「底線」はやがて、太い「錨」になっていく。その過程の分析は別稿で行うこととしたい。（了）

参考文献

日本語

- ゴルバチョフ（1996）『ゴルバチョフ回想録 下巻』工藤精一郎・鈴木康雄訳 新潮社
 陸南泉（1987）「中ソ関係発展の展望」『過渡期にたつ現代ソ連—その総合的研究 II』スラブ研究センター報告シリーズ 20 1987 年 1 月 48-52 ページ。

中国語

- 鄧小平（1993）『鄧小平文選 第三卷』北京 人民出版社
 牛軍（2010）「告別冷戦：中国実現中ソ関係正常化的歴史涵义」沈志華 李濱（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』北京 社会科学文献出版社
 錢其琛（2003）『外交十記』北京 世界知識出版社
 謝拉欽科（Sergey Radchenko）（2010）「ソ連外交機構的幹部更替与对華政策転変 1985～1986」沈志華 李濱（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』北京 社会科学文献出版社
 魏麗莎（Elizabeth Wishnick）（2010）「1980 年代早期苏联对中国政策延續和变化的压力」沈志華 李濱（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』北京 社会科学文献出版社
 楊奎松「中美和解過程中的中方变奏：毛沢東「三個世界」理論提出的背景探析」沈志華 李濱（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：冷戦与中苏关系』北京 社会科学文献出版社
 趙紫陽（2007）『趙紫陽軟禁中的談話』宗鳳鳴 記述 香港 開放出版社
 張樹華（社会科学院政治学研究所長）（2012）「蘇共敗亡的過程、原因与教訓」李慎明（社会科学院副院長）主編 張樹華等译『親歷苏联解体 二十年后的回忆与反

思』

jing, and the New Geopolitics. London: Chatham House

英語

Bobo Lo (2008) *Axis Of Convenience : Moscow, Bei-*